様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７５０２５０

研究課題名（和文）体育科における社会的態度育成の可能性に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study on the possibility of social attitude development in physical education department

研究代表者
大津　展子（Nobuko, OTSU）

茨城大学・教育学部・講師

研究者番号：３０６４８２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，1)スポーツ教育モデルを基に，我が国の体育授業において，小・中・高校の発達段階を考慮し規範や社会的な態度の育成に焦点を当てた授業を実践した。2)組織的観察法を用いて社会的な態度を表出している子どもたちの授業中の行動を評価し，授業中の社会的な行動とこれらの行動に対する子どもたちの意識の変化を分析した。3)体育授業を通じて社会的な行動を定着させ，継続して社会的な態度や意識を変容させることで，体育授業以外での子どもたちの社会的な態度の育成がどのように促されるか検討した。4)また，その発達段階による差異や特徴についても検討した。

研究成果の概要（英文）：n this research 1) Based on the sports education model, we practiced classes focusing on the development of norms and social attitudes, taking into consideration the developmental stages of elementary, junior high school and high school in our physical education lesson. 2) Evaluating behavior during class in the children expressing social attitudes using organizational observation method and analyzing social behaviors during the class and changes in children's awareness about these behaviors . 3) Consider how to encourage the development of social attitudes of children other than physical education class by establishing social behavior through physical education classes and continuously changing social attitudes and consciousness did. 4) We also examined differences and features due to their developmental stages.

研究分野：体育科教育

キーワード：社会的態度　スポーツ教育モデル

１．研究開始当初の背景

学術的背景

諸外国の動向：体育における社会的な態度の育成が要請されるようになり，アメリカでは，仲間づくりやコミュニケーション能力の育成をねらいとした Physical Challenges Program（Glover et al., 1992）が開発され，体育授業においても広く実践されるようになっている。また，Hellison（2003）によって提唱された「責任学習モデル」においては，子どもたちが自分たちの活動の実行や仲間との関わりに責任をもつ態度が強調され，その育成を意図した学習内容や学習段階が構想されている。シーデントップによって提唱された「スポーツ教育モデル」は，今日ではイギリス，オーストラリアやニュージーランドでも広く受け入れられ，特にニュージーランドでは学習指導要領にも採用されている（Siedentop，1994）。一方で，体育授業を通して本当に子どもたちの社会的な態度やコミュニケーションスキルが向上するのかという疑問もある。例えば Lambert et al.（1964）はスポーツマンシップ，フェアプレイ，ルールに従ってプレイする態度は，ゲームをプレイする身体的行為によって学習されるのではない，あらゆる態度や道徳的価値がそうであるように，賞賛に値する人たちや教養の深い人たちの行為を見習うことによって学習されると指摘している。したがって，我が国の体育授業においてもスポーツ教育モデルを体育授業に適用させ，体育授業内で育成された子どもたちの社会的な態度が授業外での表出が実現可能か検討する価値があると考えられる。

我が国の研究動向：米村ら（2004）が体育授業分析を通して示したように，子どもが評価するよい体育授業では，肯定的な人間関係行動や肯定的な情意行動が頻繁に見られ，そのような授業を実現させることのできる教師は，授業の約束事として，仲間を賞賛し励ます行動を奨励していたり，準備後かたづけに代表される共同的な活動を意図的に取り入れたりしていることなどが，体育授業中の行動的な事実として明らかにされている。同様に，体育の授業評価（形成的授業評価，診断的・総括的授業評価）を適用した多くの研究結果においても，体育授業が効果的に進められた場合には，授業評価が右肩上がりに向上し，人間関係や仲間に対する意識も肯定的に変容することが明らかにされている（平野ほか，1997；髙橋，2000；福ヶ迫ほか，2003）。他方，松本ら（2002）は，仲間づくりをねらいとして開発されたチャレンジ運動（Physical Challenges）教材の有効性を検討し，この教材が肯定的な人間関係行動や意識変容に有効であることを明らかにしている。体育が，心と体をフルに用いて展開されるという特性を有する以上，長期間に及ぶ社会的行動および意識の変容の累積が，子どもたちの社会的態度の学習につながる可能性は十分にあると考えられる。

福ヶ迫義彦・スロト・小松崎敏・米村耕平・高橋健夫（2003）体育授業における「授業の勢い」に関する検討：小学校体育授業における学習従事と形成的授業評価の関係を中心に．体育学研究 48(3):281-293.
Glover, D. R.　and Midura, D. W.（1992）Team building through physical challenges. Human Kinetics: Champaign，IL.
Hellison, D. (2003) Teaching Responsibility Through Physical Activity(2nd edition). Human Kinetics
平野智之・高橋健夫・日野克博・吉野聡（1997）体育授業における集団的・情意的行動観察の開発．スポーツ教育学研究 17(1):37-51.
Lambert W. and Lambert W.(1964) Social Psychology. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc., p. 64.
松本格之祐・山岡愛・高橋健夫（2002）体育授業における仲間づくりの可能性を検討する−チャレンジ運動とボール運動の実践から−．体育科教育 50(13):67-71.
米村耕平・福ヶ迫義彦・高橋健夫（2004）小学校体育授業における「授業の雰囲気」と形成的授業評価との関係についての検討．体育学研究 49（3）：231-243.

２．研究の目的

体育授業では，スポーツ規範（公正やフェアプレイ）や肯定的な人間関係のマナーを大切にする心的傾向を含む社会的な態度を学習内容として習得することを目指している。Siedentop (1994)は，倫理教育や社会的な態度の育成に焦点を当てた体育授業の授業モデルとして，「スポーツ教育モデル」を提唱している。本研究では，1)スポーツ教育モデルを基に，我が国の体育授業において，小・中・高校の発達段階を考慮し規範や社会的な態度の育成に焦点を当てた授業を実践する。2)組織的観察法を用いて社会的な態度を表出している子どもたちの授業中の行動を評価し，授業中の社会的な行動とこれらの行動に対する子どもたちの意識の変化を分析する。3)体育授業を通じて社会的な行動を定着させ，継続して社会的な態度や意識を変容させることで，体育授業以外での子どもたちの社会的な態度の育成がどのように促されるか検討する。4)また，その発達段階による差異や特徴についても検討することとする。

３．研究の方法

体育授業における学習者の社会的な態度育成のための学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特にフィードバック）の有効性とその移行について各小（中高学年）・中・高校と検討する。また，その発達段階による差異や特徴についても検討することとする。1）体育授業におけるスポーツ教育モデルの

社会的な態度の育成に関する学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特にフィードバック）の具体化（平成 26 年度）

倫理教育や社会的な態度の育成に焦点を当てた体育授業の授業モデルであるスポーツ教育モデルにおける社会的な態度の育成に関する学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特に教師のフィードバック）について検討し，具体化する。そして，スポーツ教育モデルを中核にした実験単元を作成し，小（中高学年）・中・高校で実施し，発達段階に応じた学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特に教師のフィードバック）を明らかにする。そして，初年度はダンスの必修化が話題となっている表現運動系及びダンスの表現・創作ダンスに着目し，小学校（中高学年）の表現，中・高校で創作ダンスの 1 単元中の授業を通じての学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特に教師のフィードバック）による効果の差異を学習者の社会的な行動を組織的観察法，学習者の意識の変容を形成的授業評価を用いて検証する。また，1 単元中に身につけた社会的な態度が体育授業外（ホームルーム活動や体育以外の授業中）の態度形成に移行しているのかについてもインタビューやアンケートで検証する。さらに，教師のフィードバックが学習者に与える影響も教師の逐語記録と学習者の形成的授業評価の関係から検証する。

（1）調査対象：埼玉県内の小学校（中高学年）・中学校・高校生。

（2）単元に組み込むべき内容：スポーツ教育モデルで提唱されている①望まれる社会的な行動（例えば，「審判に文句を言わない」など）を行動目標として具体化し学習内容に位置づけること。②行動目標が学習内容として常に意識されるように，フェアプレイポイントシステム（具体的行動目標が達成された場合にその子どもにポイントを与え，この結果をチームもしくは個人の総合成績に反映させ，さらに単元終了時に表彰する）を採用すること。③教師が社会的な行動（行動：観察可能な反応や行為）に関心をもち，説明やフィードバックなどの言語的行動として積極的に児童に働きかけることの 3 点を重視し，小（中高学年）・中・高校必ず単元に組み込むこととする。

(3）社会的な態度育成の評価：組織的観察法を用いて社会的な態度を表出している学習者の行動を評価し，形成的授業評価から学習者の意識の変容を評価する。また，その移行についてもインタビューやアンケートで評価する。

2）1 単元体育授業における社会的な態度の育成に関する学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特にフィードバック）の継時的取り組み（平成 27 年度）

（1）社会的な態度の継時的変化：平成 26 年度の授業と同様に，埼玉県内の小（中高学年）・中・高校を対象に実施する。平成 26 年の 1 単元での検証結果をふまえ，小（中高学年）・中・高校共通で 1 学期にゴール型，2 学期にネット型・ベースボール型，3 学期に表現運動及びダンス（創作ダンス）の単元を実施し，それらの累積を検証する。

（2）教材と教師のフィードバックが学習者の体育授業内の社会的な態度育成に及ぼす影響：小（中高学年）・中・高校共通で，ゴール型・ネット型・ベースボール型・表現運動及びダンス（創作ダンス）の単元を行った結果，それらの教材によっての差異と教師のフィードバックが学習者に与える影響も教師の逐語記録と学習者の形成的授業評価の関係から検証する。

3）体育授業における社会的な態度育成に関する学習形態・教材・学習指導方略・教師行動（特にフィードバック）が学習者の体育授業外の社会的な態度に及ぼす影響（平成 28 年度）

平成 27 年度に得られた結果から，27 年度と同様に小（中高学年）・中・高校共通で 1 学期にゴール型，2 学期にネット型・ベースボール型，3 学期に表現運動及びダンス（創作ダンス）の単元を実施し，学習者が社会的な態度を体育授業を通して身につけ，それを体育授業外につなげるために効果的な（必要な）学習形態・学習指導方略・教師のフィードバックを明らかにする。そして，体育授業外での社会的な態度育成にも有効な社会的な態度育成可能な体育授業の発達段階による差異や特徴についても検討する。

４．研究成果

現場との関係で、計画通り進められなかったり、すべてのしくみを適用できなかったりすることもあったが、中学校で１つ選択制のダンスの授業の実験単元を行うことができた。ダンスは、コミュニケーション能力育成に優れていると言われており、社会的な態度育成には適した教材と言える。今まであまり行われてこなかった思春期の中学生で男女共習の授業を展開したことも新しい取り組みである。そして、それを１つの研究としてまとめ、論文にできた。この論文の一部は、国際学会でポスター発表した。

また、茨城大学教育学部附属小学校でゴール型の新教材を６年生で実験的に行った結果を国際学会でポスター発表することができた。

社会的な態度育成に関して、多数の研究会や学会に参加し、情報収集をすることができた。特に、今回は上記で述べたコミュニケーション能力向上に長けている表現運動及びダンスの授業の情報を収集したり、実践したりすることが多くあった。そのため、下記に示すように、表現運動及びダンスの授業に関する図書も複数排出することができたと考

えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
1.大津展子・高田晶子・吉野聡・内田雄三(2016)中学校選択制ダンス授業に置ける一考察−生徒の授業評価と感想を中心として−**.白鴎大学教育学部論集第10巻第1号.**

2.内田雄三・阿部伸行・荒木郁登・大津展子(2016)中学校におけるバレーボールのゲームパフォーマンスに関する事例的検討．白鴎大学教育学部論集第10巻第1号.

〔学会発表〕（計　2　件）
1.Sho KOMORIYA, Nobuko OTSU, Kengo TSUJI (2016) A study of the development of decision-making ability and off the ball movement in physical education class, 2016 East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference. Taiwan.

2.Nobuko OTSU (2014) Research on communication ability improvement in physical education stay study of high school, 2014 East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference. Korea.

〔図書〕（計　7　件）
1.**吉永武史・吉野聡・大津展子他**(2017)**『楽しい体育』2月号**, No.329.32−33**頁.**

2.**茨城大学・茨城大学教育学部附属幼稚園・生越達・大津展子**(2016)**『楽しく遊んで、子供を伸ばす』（福村出版）**32−37**頁.**

3.**大津展子**(2016)**「アクティブラーニングを促す学習環境」『女子体育』**（日本女子体育連盟）第57巻8･9号32頁.

4.高野牧子･高橋うらら･大津展子他(2015)『うきうきわくわく身体表現あそび一豊かに広げよう！子どもの表現世界一』（同文書院）25-27 頁.130頁.142頁.

5.石田啓太･大津展子(2015)「タッチフットの世界」『女子体育』（日本女子体育連盟）第57巻4･5号50-55頁.

6.大津展子（2014）「私のおすすめ　THE BROADWAY MUSICAL 劇団四季　-誰も知らない、もう１つのオズの物語ー」『女子体育』（日本女子体育連盟）第56巻4･5月号77頁.

7.大津展子(2014)「ウォークラリーゴルフ！」『女子体育』（日本女子体育連盟）第56巻2･3号46−51頁.

６．研究組織
(1)研究代表者
大津　展子(Nobuko OTSU)
茨城大学･教育学部･講師
研究者番号:30648241